

春秋会

ニュースレター

2025年

12月・

2026年

1月号



1月・2月の予定

- ・1/9 (金) 15:00~
会長当選祝賀会
- ・1/20 (火) 15:00~
常議員会
- ・1/21 (水) 12:00~
幹事会
- ・1/30 (金) 19:00~
(春秋) 当選祝賀会、新年会
- ・2/3 (火) 15:00~
常議員会
- ・2/5 (木) 18:00~

会計のいろは研修のご報告

研修委員会 秋谷拓実 (77期)

令和7年11月17日(月)、会計のいろは研修を春秋会研修委員会で実施いたしました。

本研修は2部構成で行われ、新川大祐先生(北斗税理士法人)、野村祥子先生(堂島法律事務所)、松本智子先生(久保井総合法律事務所)を講師としてお迎えし、実施されました。

倒産・事業再生、債権回収等の分野で豊富な実務経験を有する先生方から、実務に即した貴重なお話を伺うことができました。



第1部では、研修委員によるシナリオ形式の解説を通じて、決算書の基礎的な考え方を学びました。

本パート最大の特徴は、今井弁護士が「決算書がまったく分からない素人役」を演じるという設定です。

もともと、今井弁護士は研修委員会の大先輩。その大先輩に対し、後輩弁護士が、「そこからですか」「それは超ド素人ですね」といった具合に容赦ないツッコミを入れながら、貸借対照表(B/S)や損益計算書(P/L)の基礎を一から解説していくという構成で進められました。

この先輩・後輩の関係性を逆手に取ったやり取りが会場の笑いを誘い、決算書に対する心理的ハードルを大きく下げる印象的な導入となりました。

研修後には、「内容が分かりやすいだけでなく、脚本としても完成度が高い」「名脚本だった」といった声も多く、ユーモアと学びを両立させた第1部は大変好評でした。

内容面でも、資産・負債・純資産の関係、B/SとP/Lのつながり、利益の種類や減価償却の基本的な考え方など、決算書を理解するうえで押さえておくべきポイントが、具体例を交えながら整理されていました。



政策委員会「委員会活動のこれからを語ろう」

・2/17 (火) 12:00～

常議員会

・2/18 (水) 12:00～

幹事会

・2/18 (水) 13:00～

第4回選考委員会

■2025年度 広報委員

・柳勝久 (61期、委員長)

・河野雄介

(60期、担当副幹事長)

・西原和彦 (55期)

・堀川智子 (57期)

・溝上絢子 (57期)

・浦寛幸 (59期)

・松尾洋輔 (59期)

・広瀬元太郎 (60期)

・山田寛子 (65期)

・金星姫 (66期)

・木場晶子 (67期)

・田村瞳 (67期)

・板崎遼 (67期)

・吉留慧 (68期)

・高一成 (69期)

・根本俊太郎 (70期)

・足立敦史 (71期)

・村本健司 (71期)

・河野哲平 (71期)

・才木晴幹 (72期)

・中岡さつき (72期)

・中西教子 (72期)

・久井大輝 (73期)

・佐々木崇人 (74期)

・神澤鈴子 (74期)

・小林悠人 (76期)

・永田駿 (76期)

・山口謙都 (76期)

第2部では、清水弁護士がコーディネーターを務め、講師の先生方をパネラーに迎えて、パネルディスカッション形式で研修を行いました。

本パートは当初、決算書を正確に理解することで、倒産・事業再生や債権回収といった分野において、より主体的な判断が可能になるのではないかと、という発想から企画されました。

しかし、講師の先生方との事前打合せを重ねる中で、この考え方は徐々に修正されてきました。議論の中で繰り返し指摘されたのが、決算書には明確な限界があるという点です。

決算書は、企業の過去の経済活動を記録した資料にすぎず、足元の資金繰りや今後の事業継続可能性を直接示すものではありません。

そのため、決算書の数字からすべてを理解しようとするのは適切ではなく、実務においては資金繰り表の確認や、現場でのヒアリング、公認会計士・税理士との連携が必要であることが共有されました。

本番のディスカッションでも、「倒産・破産の場面では、決算書はあくまで補助資料にとどまること」、「方針判断においては、過去の決算書よりも現在・将来の資金繰りが重要であること」、「『決算書が読める＝仕事ができる』と短絡的に考えるべきではないこと」といった点が、具体的な実務経験を交えながら強調されました。

結果として第2部は、決算書をどう読むかではなく、決算書をどう位置付け、どう距離感を持って使うかを学ぶ内容となり、参加者にとって実務的示唆に富む時間となりました。

本研修を通じて、決算書は万能な資料ではない一方で、正しい位置付けを理解したうえで活用すれば、弁護士実務において有用なツールとなることが改めて確認され、とても充実した研修になりました。

研修委員会では、今後も新人・若手弁護士の実務力向上につながる研修を企画してまいります。ぜひ今後の研修にもご参加ください。

以上



10年後も選ばれる弁護士

になるキャリア戦略

研修委員会 池本亮太（76期）

2025年12月3日に研修委員会主催の『10年後も選ばれる弁護士になるキャリア戦略』が開催されました。

パネリストとして中井洋恵先生、中森俊久先生、繁松祐行先生をお迎えし、コーディネーターとして今井力委員が入りました。

案件獲得・依頼者との信頼関係構築、専門性の確立、忙しさとの向き合い方を20年以上弁護士として活動された先生方のご経験を踏まえてお話をいただき、若手（といってももう3年目になりますが...）の私にとって、とても勉強になる内容でした。



特に専門性については、中井先生の専門性を突き詰めたお仕事の進め方と、中森先生のゼネラリストとしてのお仕事の進め方で対比しながらお話を聞くことができ、大変参考になる内容でした。



パネリストの先生方から弁護士業務にどのように向き合うか、何をモットーとされてきたかについてもお話しいただきました。この点については、本研修に参加されている先生方としても、刺さる内容が多かったのではないのでしょうか。私が最も刺さったのは、「弁護士業務は“たこ焼き”のようなもので、焦げ付かないようにバランスよく回して進めることが肝要だ」というものです。私も仕事が追い付いていないとき、ついつい依頼者とのコミュニケーションが不足してしまうことがあり、先生方の話をお聞きしながら、「あの依頼者と最近連絡をあまりとれていないなあ...」、「もっとまんべんなく依頼者とコミュニケーションを取らないとな...」と感じたところです。

今回、研修でも講師の先生方から大変参考になるお話を出て、盛り上がりましたが、その後の懇親会も大盛況でした。弁護士会館の13階のトイレはいつになったら使えるの？ 法テラスの報酬が少なくて振込みも遅いのは何とかならないの？ 「ひまわり」の登録人数が一定の



期から激減しているので何とか盛り上げていきたい…etc. また、弁護士会や委員会活動などのディープな話も出てきました。

今後も研修委員会は様々な研修を行い、皆様の弁護士業務に役立つことや、日々の生活が豊かになるような研修を提供していきたいと考えております。ぜひ奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

ワインの夕べのご報告

親睦委員 板崎 遼 (67期)

令和7年12月4日(木)、恒例の「ワインの夕べ」がリーガロイヤルホテル大阪にて盛大に開催されました。例年多くの会員に参加いただいている本イベントですが、今年も春秋会会員のみならず、ご家族で、事務員を引き連れて、さらには万博会場で意気投合したゲスト(とそのご主人)を伴ってなどなど、多数の方に参加いただきました。

当日は、日本ソムリエ協会名誉会長であり、リーガロイヤルホテル大阪のマスターソムリエを務める岡昌治氏にお越しいただき、岡氏が厳選した5種類の至高のワインを、岡氏の解説とともに、ホテルの美食とのマリアージュで堪能しました。



「日本ソムリエ協会名誉会長の解説」と聞くと、何やら難しそうなイメージを持たれるかもしれません。

しかし、リピーターの会員にはすっかりお馴染みの通り、岡氏のユーモア溢れる軽快なトークは、ワインと料理を一層美味しく引き立ててくれます。



さらに、グラスが空けば（時には空く前にも）岡氏やスタッフが次々とおかわりを注いでくださり、ついつい飲み過ぎてしまいます。



山ほどあります

ワインと食事が進む頃、豪華景品を懸けた恒例の「チーム対抗ワインクイズ」がスタート。当日提供されたワインをお持ち帰りという大変魅力的で、正解に向けて欲望むき出しとなる恒例企画です。

今年のハイライトは、ある○×問題で的一幕です。「○○と○○は（距離が）近い。○か×か」（ワインが進み過ぎて詳細な問題はもはや忘却のかなたに・・・）という出題に対し、参加者席から「近いかどうかは個人の主観ではないか。客観的事実に基づいた出題をせよ」と、弁護士らしい物言いが。しかし、この場は岡氏に主観で「美味しい」と選んでいただいたワインをたらふく飲む場ですから、この場では岡氏の主観こそが絶対的な正義であり正解です。

最終的に、見事「岡氏の主観」を読み解き、最高得点を獲得した3チームが景品のワインを手に入れました。

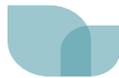


楽しい時間はあっという間に過ぎてお開きに。それでも飲み足りない面々は、夜の街へ消えていきました。2件目のワインバーへ向かう者、深夜までカラオケで喉を鳴らす者、思い思いの夜は更けていきました。

今年も多くの方にご参加いただき、大盛況のうちに終えられましたことに感謝申し上げます。来年、さらに多くの皆様と乾杯できることを楽しみにしています。

本日のワインリストは、こちら

- ・ダンザンテ・プロセッコ・エクストラ・ドライ <テヌータ・ディ・トスカーナ>NV
- ・甲州・テロワール・セレクション <勝沼醸造>2023年
- ・グリュナー・フェルトリーナー・ブリュン <フリッツ・サロモン>2020年
- ・シュペートブルグンダー・トロッケン <クレブス>2022年
・ラ・クロズリー・ド・カマンサック 2011年



ひと月一島、国内航路全制覇への旅(18)

～香川県：伊吹島～

広瀬元太郎（60期）

みなさま、新年あけましておめでとうございます。

島めぐりの記事も4年目に入りました。最近、他の記事が盛りだくさんなため、間があいておりましたが、積極的に島めぐりを続けていくことにします。



四国の香川県は、日本の都道府県の中で最も面積が狭く、1863 km²である。日本で一番広い市である岐阜県高山市 (2177 km²) よりも狭い。筆者が子供のころは、最下位が大阪府で香川県はブービー賞であったが、大阪府は関西空港や夢洲などの大規模な埋立てにより面積を増やしたため、最下位が変動した。一方で、島は多く、前々回の男木島、女木島も香川県であり、shunjuu2024 年度春号で特集した豊島も香川県である。

伊吹島は、そんな香川県西端の、いりこ（讃岐うどんの出汁に使われる）と迷路の島である。香川県の本土（四国島）の西10Kmに位置し、香川県観音寺市に属しているが、愛媛県の北の海上にあるといってもよい。筆者は、愛媛県東部の新居浜市で高校を卒業するまで暮らしており、そのころから鉄道と地理が大好きだった。自宅周辺の国土交通省地理院地図（当時は建設省）を買ってきては（当時は、ネットがないので紙）眺めていたので、自宅の近くに伊吹島という離島があることは知っていた。行って見たいと漠然と思っていたが、行かないまま年月が過ぎ、40年越しの希望が叶うこととなる。

2026年1月3日、テレビもつまらないし、朝の7:34の新幹線で新大阪を出発する。島とは直接関係ないが、岡山まではwesterポイント超特典きっぷを使う。この切符は、期間限定で、定価の4分の1のwesterポイントで新幹線に乗れるという大盤振る舞い切符である。JR西日本の回し者ではないが、軽く説明するとwesterポイントとは、JR西日本のポイントで、JALやANAのマイルにあたる。

イコカのチャージ額の1.5%（ゴールドカードなら3.0%）のポイントが、JR西日本のカード決済額の0.5%（ゴールドカードなら1%）のポイントが、またネットで特急の予約をすれば5%くらいのポイントがそれぞれ付与される。ということは、超特典きっぷに使える1ポイント=4円に相当するので、使い方によっては10%~20%の還元率となる。われわれ鉄道を趣味とする者にとっては、強い味方である。

さて、岡山で在来線に乗り換え、10:20に香川県西端の街である観音寺市に到着。伊吹島行の船は一日5便で、次の便は11:20発である。観音寺駅と観音寺港は約2km離れているが、1時間あれば歩いて十分間に合う。伊吹島の人口は令和2年の資料で323人である。過去の経験上、この人口規模で著名な観光地がなければ、店はせいぜい1軒、かつ正月三賀日なので、ほぼ確実に休業しているだろう。そこで、地元のスーパーで菓子パン等を買っていく必要がある。そういえば、朝食も新大阪駅のコンビニで買ったおにぎりとサンドウィッチだった。島めぐりの旅を連載していると、毎回、おいしい海鮮料理に舌鼓を打っていると誤解している方もいるが、食事は大半が菓子パン



かコンビニ弁当である。島めぐりは、おのおの一人旅なので、海鮮料理に向かない。なお、筆者は瀬戸内育ちであるが、魚より肉の方が好きであり、愛媛県出身だが果実としてのみかんはそれほど好まない（ポンジュースは好きである）。

観音寺港から伊吹島までの船は、ニューイブキ2世号という名である。New伊吹の2世なのだから、3代目

ということか？船は思っていたより大きい。客室は2層で、荷物室も入ると3層である。また、正月だからかもしれないが、乗客もかなり多く50から60人くらいは乗ってそうな気がする。乳児をつれた里帰り風の家族も数組おり、船内の大型テレビで垂れ流されているま

ったりとした正月番組が、けだるい雰囲気を増幅している。地球の反対側のベネズエラでは、米軍に大統領が拘束され、かなりの大事件だとは思うが、日本のメディアは、これを真剣に報道するつもりはないようである。船内のまったり感に対し、今日は瀬戸内海には珍しく、海が荒れている。波を超えるたびに船が上下動し、盛大にしぶきを上げて進む。

この船が伊吹島に着くのが11:45、帰りの船が13:30、その次の便が17:10。17:10だと暗くなるので、13:30の船で帰ることにしたい。さて、島で何をするか？島めぐりにおいて何をするかは、実は重要な課題である。とりあえず、いつも礼儀として島を一周するが、伊吹島は面積1.09km²、周囲5.5kmである。島の半分は山で道路がないため、おそらく30分で一周できてしまうだろう。特に観光地もないし、食事を摂るところもない。持ってきた島の地図を見ながら考えていた。島の道路は迷路状に錯綜しており、迷路マニアでもある筆者の心は踊る。地図を見ながら、この島の全ての道を歩いてみるという野望が湧いてきた。集落は島の中心部にまとまっているため、地図を見る限り無理ではなさそうである。これを今回の目標としよう。



11:45 定刻に島の南側の真浦港に着岸した。栈橋には島民のバイクがずらりと並んでいる。道が狭くて坂が多い瀬戸内海の島「あるある」だ。バイクの下には、何匹も猫が丸くなっている。これも、島「あるある」の風景である。伊吹島は、島の周りが崖で、崖の上が平地になっており、いわば、海に浮いたプリンのような地形である。集落は

プリンの上面にある。真浦港はプリンの斜面の下にあることになる。これらのことは予備知識として持っていたが、港について見上げると、プリンの斜面は思いのほか高く、上面の集落に着くまで10分くらいかかりそうだ。面積1km²=1km四方という情報から、小さな島と舐めていたが、すべての道の制覇は厳しいかもしれない。

島を一周する道路はなく、南の真浦港から島の東側を経て北側の港に至るプリンの崖下の道で半周できるだけである。西半分は人家が無

く、プリンの崖が険しいので道はない。まずは、この東側半周道路を歩くことにする。この東側の崖の下には、いりこ工場が連なっている。事前に YouTube 等で調べたところによると、いりこの原料はカタクチイワシであり、伊吹島の近海でとれる。カタクチイワシをいりこにする工程は、時間との勝負らしく、水揚げから分単位で加工を開始しないと価値が下がるらしい。そのため、イワシを捕獲する船と捕獲したイワシを運搬する船は別にある。全部捕獲し終えてから港に帰ったのでは、最初に捕獲したイワシの鮮度が落ちるからである。そして、運搬船で陸揚げしたイワシは、直ちに加工しないといけないため、海のすぐ横に加工場を作る必要があるのだ。イワシをプリンの上面まで運んでいる時間はないらしい。各工場に小さな栈橋があり、その栈橋から、工場の仲までイワシを吸引するホースが伸びている。いりこの旬は夏のように、今はシーズンオフのリゾート地のように静まり返っている。崖の下の道なので、標高は低く、海面すれすれである。真冬で視界が効くため、海の向こうに香川県の四国本土や、岡山県と香川県の間塩飽諸島の島々、遠くには本州の工場が見える。遠くの島や建物ほど、下半分の低い部分が海面の下に沈み込み見えない。地球が球体であることが立証できる。途中、完全に工場の敷地内と思われる区間や、なぜかいきなり山羊とかが現れて楽しい道であった。12:05 ころ島の北側の港に着いた。半周で20分か。それも、崖下のアップダウンの無い道で。島のサイズ感の読み違いに戸惑う。



ここから、プリンの上面に登り、迷路を徘徊することにする。闇雲に歩くと同じところを回ったりして重複するため、今回は地図に歩いた軌跡を記録しながら歩くことにする。アリアドネの系（ギリシャ神話、詳細は検索）である。プリンの上面は全くの平地ではなく、西側が高く東側が低い。南北では、北側が高い。道は、右に左に上下

に屈曲し、歩いているうちに方向を失っていく。何度か立ち止まり、地図上に赤線を引いていく。ほとんど島民に合わないが、客観的に見れば、不審者またはスパイ活動である。港やいりこ工場の近くだけで

はなく、プリンの上にも猫は多い、汚い猫が現れ、筆者の前を何度も後ろを振り返りながら逃げていく、筆者は追いかけているつもりはないが、猫が勝手に、筆者の目的方向に行くので、追いかけていると勘違いしたのか、筆者に対して威嚇をしてきた。昨今、クマの出没が世間をにぎわしているが、この種の動物の始末の悪いことは、当方に敵意が全くなくとも、勝手に攻撃してきていると誤解して、反撃してくる点である。誤想防衛である。これが事実の錯誤なのか、法律の錯誤なのかは諸説がある。



猫の威嚇をかわすと少し大きな道に出て、島唯一の郵便局がある。その前を東に進み、島の小中学校に着く、近くには保育所もある。島の人口が323人ということ

あり、おそらく、高齢化率は平均値よりもずっと高いと思われるので、生徒数は一桁または十人台と考えられる。ところで、資料によると、伊吹島に最も多く人のいたのは、1950年の4325人である。それが、2000年には1020人となり、2020年に323人である。70年前に13倍の人がいたのはともかくとして、2000年からの20年で70%も減少しているのは驚きである。2000年ってそんなに昔ではない。読者の多くは、すでに弁護士になっていたというレベルの時期である。エクセルで計算してみると、年率5.6%の減少であり、同率で減っているとすると、2025年の推計人口は、241人である。興がのったので計算すると、2045年は102人である。徘徊しているときに気付いたのだが、確かに、明らかな空き家や、朽廃して屋根に穴の開いた家、基礎だけが残っている土地が多い。島めぐりの旅は（ローカル線巡りも同様）過疎と高齢化を目の当たりにする旅でもある。日本人の減少率は年間0.74%で、伊吹島とは桁が違うが、進んでいる方向は同じである。最近、人手不足のためのバスの減便や廃業の話をよく聞く。飲食店でもスマホでの注文が増えてきた。自分の老後、金はあっても面倒を見てくれる社会は維持されているのだろうか？少し怖い。



学校の先の藪の多い道を抜けて、北側の港を見下ろす崖の上に出る。そして、一旦集落の中に入る。島の祭りの太鼓台倉庫の前にちよとした広

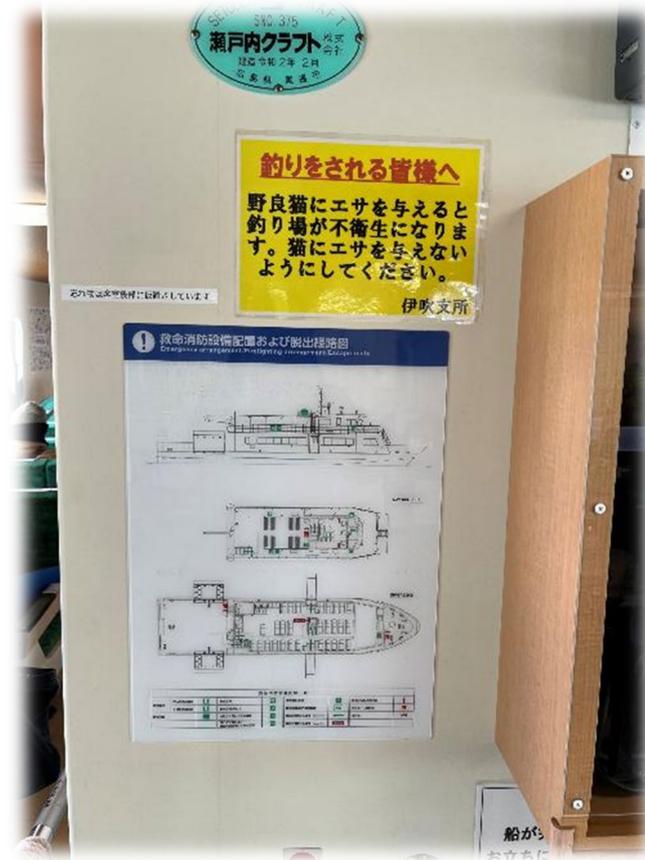
場があり、そこに島内乗り合いバスのバス停がある。そこには、「のりあいバス（伊吹線）」ボディに書かれたスズキの軽自動車が停まっていた。島にバス路線があるのは事前に知っていた。ただ、歩きながら、この島にバスの通れる道があるのかと薄々疑問に思っていたが、答えが出た。乗り合いバスとは、定員実質3名（運転士除く）の軽自動車だった。



バス（？）の止まっている広場を越えて、適当な道を歩いていると、見覚えのある所に出て、さきほどの猫と思われる猫が道端で

寝ている。このように、一度通った所に戻ってきたことが唐突にわかる感覚が、迷路歩きの醍醐味である。すでに島に着いてから1時間以上が経過し、すべての道を歩くのが無理なのはわかってきた。プラス1時間あれば、すべての道は制覇できそうだが、そのために4時間後の船に乗るのもつらい。集落で一番高い場所にあると思われる家の横を抜けて、島の西側が見渡せる場所に出た。以前に行った魚島や、出身地の愛媛県新居浜市の工場群も見えた。今年の正月はめんどくさいので帰省しなかったが、実家のすぐそばまで来ている。

そのあとも、徘徊は続き、島の中心部の神社や、旧伊吹小学校（前述の小中学校に統合される前は、小学校は中学校と別の場所にあっ



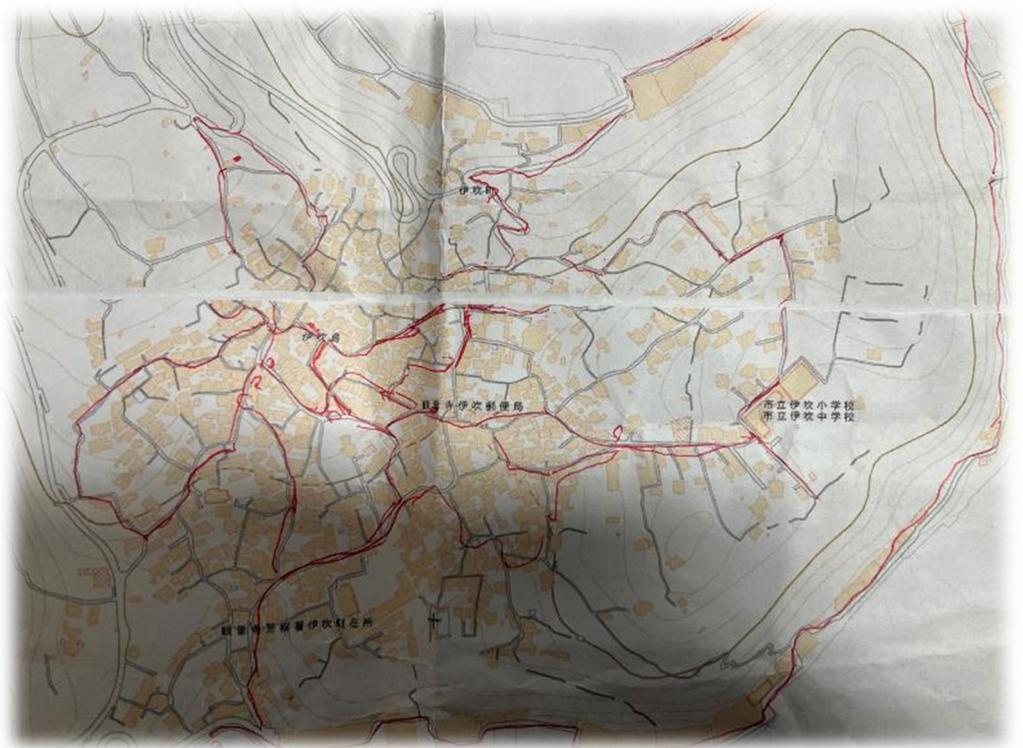
た)、さきほどの郵便局、バス停広場の前を何度も通った。そうこうしている間に、帰りの船の時間が近づいてきた。プリンの上面から真浦港に降りる急な坂道の下に3階建てくらいの旅館があった。この島に来る客の大半は、私のように迷路を徘徊する猫のような者ではなく、釣り客である。船の中にも、「釣りのエサをここに置くな」とか、「釣り場が荒れるので、猫にエサ

をやるな」とか、釣り客を対象とした注意事項が書いてあった。

13:30の出航時間の5分前に港に着いた。ちょうど、船が汽笛を鳴らした。もうすぐ出航するとの合図であるが、5分前に鳴らされても…という気はする。帰りの船は、行きの船よりも混んでいた。数えてはいないが100人近く乗っているような気がする。今の人口（広瀬推計値）の4割が乗っているということなんだろうか。今日は1月3日なのでUターン客が多いのであろう。つまりは、島を去った人がこれだけいるということでもある。

船の後部に立って去っていく島を見るのは感慨深いものがある。この日は、西風が強く、船は追い風に乗って結構な速さで島を去っていく。島はどんどん小さくなっていった。いつもは、この島にはもう来ないだろうなと思いながら島を見るのだが、でも、なんかこの島には、もういちど来そうな気がする。

そういえば、昼ご飯の菓子パンを食べるのを忘れていた。



執行部だより～カレパーティー～

副幹事長 繁松祐行（63期）

今年度春秋会の副幹事長として研修委員会を担当させていただきました。この間、研修委員会のみなさんに精力的に頑張ってください、ビジネスマナー研修（6月4日実施）、春秋の日 弁護士と市長の視点から見る行政への関わり方（10月15日実施）、会計のいろは・決算書の読み方（11月17日実施）、10年後も選ばれる弁護士になるキャリア戦略（12月3日）と4回の研修を実施することができました。いずれも普段はなかなか聞くことができない貴重な内容で大変勉強になりました。多くの方にご参加いただき、ありがとうございました。

ところで、ニューズレターの8, 9月号の執行部だよりで奥津先生が趣味のカレーの記事を書かれたのはみなさんもお存じのところと思います。今年度執行部では、是非、奥津先生のカレーを食べたいということで、12月1日にレンタルキッチンを借りてカレーパーティを行いました。



当日は、奥津先生がポークビンダルーというインドのゴア地方発祥のカレーを作ってくださいました。そして、せっかくレンタルキッチンを借りるからということで、黒田先生がニューヨークお馴染みの?アップル

サイダーを、中西先生がアヒージョを、河野先生が生ハムと洋梨のサラダを作ってくださいました。みなさんこんなに料理ができるということにびっくり。何も作ることができない私は、村本先生と最近始めたゴルフの話で盛り上がった後、先生方が作った料理をありがたくいただきました。



ポークビンダルーは豚肉と酸味がマッチしてとてもおいしく、何杯でもおかわりをしたいぐらいでした。もちろん、アヒージョやアップルサイダー、生ハムと洋梨のサラダも文句なしのおいしさでした。

こんな感じで今年度の執行部は、黒田幹事長のもとで和気藹々と楽しくやらせていただいています。今年度も残すところ3ヶ月ほどになりましたが、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。



あとがき

広報委員会では、会員の皆様から原稿を大募集します。ぜひ、ご連絡ください。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

などありましたら、以下のアドレスにご連絡ください。

広報委員長 柳 勝久 katsuhisa.yanagi@dojima.gr.jp